

SPECIAL ISSUE：地域に学ぶ観光教育・研究の実践
観光フォーラム

世界自然遺産知床のエコツーリズムと地域社会の課題 —冬季の知床観光を体験して—

Ecotourism and community issues in Shiretoko Peninsula World Natural Heritage:
from the experience of winter tourism activities

尾鷲 那月

Natsuki Owase

和歌山大学観光学部

キーワード：世界自然遺産、自然保護、観光振興、エコツーリズム、ステークホルダー

Key Words：World Natural Heritage, nature conservation, tourism promotion, ecotourism, stakeholders

I. はじめに

本論では、和歌山大学観光学部（2019年当時、国際観光学研究センター）のチャクラバルティー・アビック講師が行っていた知床半島におけるエコツーリズムの調査のアシスタントとして他2名の学生とともに2019年2月9日から2月13日にかけて知床半島を訪れた経験を踏まえ、世界自然遺産知床の現状と持続可能な観光の課題について記述する。

知床は北海道北東部に位置する太平洋に突き出た半島で、斜里町と羅臼町の2つの町で構成される。斜里町と羅臼町の統計によると、平成30年度、斜里町には年間1,140,221人¹、羅臼町には年間509,653人の観光客が訪れている²。知床では、夏期にはホエールウォッチング、冬期には流水ウォークなどの体験型ツアーが人気で、観光客は年間を通して知床の自然を楽しむことができる。その一方で、自然資源の過剰利用や野生動物に対する観光客のマナーの問題が指摘されている³。今回の調査では、冬季の知床半島における観光を体験し、ビジターセンターの来訪者に聞き取り調査を行った他、シマフクロウ研究者として国際的に著名な竹中健氏や、当時環境省の羅臼事務所自然保護官を務めていた守容平氏らから話を聞いた。

II. 世界自然遺産としての知床の特徴

1964年（昭和39年）に知床半島の一部が国立公園として指定され、2005年（平成17年）7月にそのほぼ同範囲と一部の海域が世界自然遺産に登録された。知床自然センターによると、世界自然遺産に選定された理由として3つのポイントがある。1点目は「生態系」、2点目は「生物多様性」である。知床では流水の恵みによって独自の生態系が形成され、絶滅危惧種を含む様々な生物が生息している。そして、3点

目に「保護管理体制」が挙げられている。知床財団をはじめとした自然環境保護団体がある他、環境保全を目的とした委員会等が設置されている。この3点が高く評価され、世界自然遺産の登録に至ったのである⁴。さらに、知床の生態系の基盤である流水は生物多様性を支えているだけでなく観光資源として注目を集めている。

では、知床の自然環境において欠かすことのできない流水はどのように形成されるのだろうか。知床自然センター内展示パネルに以下のような説明がある。「まず、中国とロシアの国境を流れるアムール川の淡水が深さ約830メートルのオホーツク海に流れ込むことによって、オホーツク海の表面から深さ約50メートルの部分が塩分の薄い水で覆われる。この表面から深さ50メートルほどの部分がシベリアからの冷たい寒気によって冷やされることで凍り始め、流水が形成されるのである。」つまり、流水は、アムール川から注ぎ込まれる大量の淡水やシベリアからの冷たい空気などの特殊な地理・気象条件が生み



写真1 斜里町で流水を見る人々。道路沿いに連なって駐車されている。（チャクラバルティー・アビック撮影）

出す自然現象である。

流水は例年 1 月下旬頃、知床に漂着する。北海道オホーツク総合振興局によると、春を迎えて溶け始めた流水からは栄養分が溶け出す。その栄養分によってプランクトンが大量に発生し、それを餌にする魚から、魚を餌にするクジラやトド、ウミワシなどの動物へと食物連鎖が保たれている。また産卵のために川に戻ったサケなどをヒグマやキツネなどが食べ、食べ残された死骸が土に還ることで豊かな森が養われる⁵。このように、流水の恵みによって海、川、陸、山の動植物が密接に繋がっている。

ヒグマ、アザラシ、シャチ、マッコウクジラ、カラフトマス、エゾマツをはじめ多種多様な動植物が見られる知床は、国内有数の希少種の貴重な生息地でもある。今回の調査で注目したシマフクロウは、環境省レッドリスト 2019 によると「ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの」である絶滅危惧 IA 類 (CR) に登録されている。また、国際自然保護連合 (IUCN) レッドリストでは、危機 (EN) とされている。さらに、今回の調査中に目にしたオオワシとオジロワシは、国内の「絶滅の危険が増大している種」である絶滅危惧 II 類 (VU) に指定され、IUCN レッドリストでは オオワシが危急 (VU) とされている^{6,7,8,9}。

知床の自然環境の保全に取り組む代表的な地域団体が公益財団法人知床財団である。その取り組みの 1 つに、「100 平方メートル運動の森・トラスト」の現地業務がある。斜里町役場 総務部環境課 自然環境係によると、1977 年、当時乱開発の危機に瀕していた国立公園内の開拓跡地を、寄付を募って買い取る「しれとこ 100 平方メートル運動」という取り組みが始まった。1997 年からは「100 平方メートル運動の森・トラスト」として、買い取った開拓跡地に植林を行うなど次世代の森づくりがなされている¹⁰。このような地元主体の保護活動が世界遺産の適正管理として評価されている。

Ⅲ. 調査日程、調査内容

調査は、2019 年 2 月 9 日から 13 日にかけて知床半島とその周辺にて実施された。以下表 1 は、調査日程を表にまとめたものである。

日付	日 程
2 月 9 日	関西国際空港からたんちょう釧路空港へ飛行機で移動 たんちょう釧路空港から網走駅までバスと電車で移動
2 月 10 日	「網走流水観光砕氷船おーろら」乗船 車にて斜里町へ移動 知床世界遺産センターを見学 知床ゼミへの参加 竹中氏の案内によるシマフクロウの鳴き声を聞く体験
2 月 11 日	知床自然センターで来訪者に聞き取りを実施 知床五湖にてスノーシューウォークを体験 車にて羅臼町へ移動

2 月 12 日	羅臼ビジターセンターにて守氏と意見交換、来訪者に対して聞き取りを実施 知床ネイチャークルーズを体験 車にて釧路市に移動
2 月 13 日	飛行機にてたんちょう釧路空港から関西国際空港へ移動

表 1 調査日程表

調査項目は以下のとおりである。

1. 「網走流水観光砕氷船おーろら」乗船体験
2. シマフクロウの鳴き声を聞く体験
3. ビジターセンターでの展示の見学
4. ビジターセンターへの来訪者に対する聞き取り
5. 知床で実施されているエコツアー体験
6. 知床ゼミを聴講して
7. 環境省職員の話聞いて

聞き取りについて、知床訪問前に準備した質問内容は以下の表 2 のとおりである。次章ではそれぞれの項目を通して体験したことを順番に紹介する。

Ⅳ. 調査結果

1. 「網走流水観光砕氷船おーろら」乗船体験

調査地である知床を訪れる前に、網走に立ち寄った。「網走流水観光砕氷船おーろら」(以下、おーろら)に乗船し流水の大きさを間近で体感するためであった。おーろらは網走港を出発して網走沖にて流水を見る約 1 時間のクルーズで、料金は大人 1 人当たり 3,500 円である。午前中の便に乗船した。乗船場に着くと長蛇の列ができており、クルーズの人気の高さが窺えた。いざ乗船すると最大定員数 450 名¹¹の砕氷船には沢山の人が乗っていた。デッキは特に人が込み合っており、観光客は流水の写真を撮影したり、頭上を飛んでいるカモメを見たりと景色を楽しんでいた。おーろらに乗って、船上から間近に流水を見られた上、野生のウミワシをはじめ観察することができた。しかし、この船が流水を割りながら進んでいるこ



写真 2 観光客を乗せたおーろら
(チャクラバルティー・アビック撮影)



写真 3 おーらから見た流水（筆者撮影）

とを忘れてはならない。知床の多様な生態系、その根幹が流水だという事実を知らないからこそ純粋な気持ちで楽しめる観光船である。また、乗船中は周りの景色や地域の観光資源に関する簡単な放送が流れていたが、流水の成り立ちやその役割の詳しい説明はなかった。

2. シマフクロウの鳴き声を聞く体験

クルーズが終了してからシマフクロウの専門家である竹中健氏と合流し、知床（斜里町）へ向かった。竹中氏は長年シマフクロウの保護と知床国立公園の保全活動に関わっており、知床の自然環境の有識者である。竹中氏から、シマフクロウの現状について聴取することができた。シマフクロウは世界最大のフクロウであり、羽を広げれば2メートル近くある夜行性の猛禽類である。川沿いの森に棲んでいて、ほぼ魚だけを頼りに生きる動物であるため、河川流域の環境の豊かさを象徴する生き物として知られている。日本では北海道だけに生息し、現在その多くは知床半島に集中している。シマフクロウの存在が世界遺産登録の主な理由の一つでもあったが、現在、巣を作れるような大きな木が極めて少なく、非常に脆弱な存在であることを聞いた。その日の夜、竹中氏の案内でシマフクロウの鳴き声を耳にすることができた。人を避けて生活している動物で、その姿が見られるのは非常に稀だという。「ボーボー」と遠くに聞こえる鳴き声は神秘的であった。動物とのふれあいは見ることや写真に残すことだけではない。特に野生動物においては専門家の指導の下、適切な距離を保った上でその存在を感じるというのも興味深いものである。

3. ビジターセンターでの展示の見学

今回の調査では、知床自然センター、知床世界自然遺産センター、羅臼ビジターセンターの3つの施設を訪れた。知床自然遺産センターや羅臼ビジターセンターは自然遺産の区域外にあり、環境省の自然保護官事務所が併設されている。一方で知床自然センターは世界遺産区域内唯一のビジターセンターで、知床財団が管理運営を行なっている。以下、見学し

た際の印象をまとめたものである。

・知床世界遺産センター

センターには、シマフクロウやオオワシの生態についての展示の他、知床や国立公園に関する書籍が置いてあった。一部の透明になっている床下にはサケの模型が展示されていて、上から川の底を覗くように見ることが出来るなど、展示はどれも工夫を凝らしたものであった。その一方で夕方に訪れたためかもしれないが、照明の明かりが少なく、暗い印象であった。訪問時、他の来訪者は少なかった。

・羅臼ビジターセンター

羅臼は漁業中心の町であり、活動のほとんどが沿岸部に集中している。少し山側に行くくと人影はほとんど見えなかった。羅臼ビジターセンターは沿岸部から少し離れた羅臼温泉の近くにある。シャチの骨格標本やシマフクロウの標本があるなど、展示が充実していたが、聞き取りができたのが1組であったことから分かるように、館内は閑散としていた。

・知床自然センター

知床自然センターは冬季の知床観光の人気スポットである知床五湖の近くにあり、知床財団によって運営管理が行われている。上記2つの施設に比べると、知床自然センターでは人の出入りが多かった。その理由として知床五湖のツアーの開始点であること、お土産売り場やフードコートが設置されていることが挙げられる。有名なアウトドアブランド THE NORTH FACE や mont-bell の商品をはじめ、知床の動植物のイラストが入ったポストカードなどのグッズが販売されており、スノーシューのレンタルサービスなども行われている。聞き取りの協力者の中にはお土産を見るために立ち寄ったという来訪者が1名いた。また、フードコートで食事を取っている来訪者も数多く見かけた。展示では、オジロワシの分布（写真4）やオオワシの渡り（写真5）について、温かみのある手作りのパネルで説明されていたのが印象的であった。

各ビジターセンターで人数に違いはあるものの、3つの施設の共通の課題として、来訪者の少なさが挙げられる。それは、網走のおーらや後述する羅臼の知床ネイチャークルーズへ



写真 4 オオワシの渡りについての展示（筆者撮影）



写真5 オジロワシの分布についての展示（筆者撮影）

の乗組客が大勢であっただけになおさらである。このことから、冬の知床には多くの観光客が訪れるものの、国立公園や世界遺産の特徴について学ぶ観光客は少ないことが分かる。すなわち、観光客がツアー参加の前後に知床の自然や環境保全に関心を抱き、知ろうとするまでの導線ができていないと言える。自然遺産管理の面から考えれば、観光客が自然保護について考える施設がビジターセンターである。とりわけ世界遺産の場合、ビジターセンターは来訪者にその場所の特徴を説明し、適切な行動を指導する施設として機能することが期待される。したがって知床の保護管理体制が評価されても、ビジターセンターに観光客が訪れていないことは大きな課題であると指摘できるだろう。また、ビジターセンターのスタッフと来訪者の会話が少ないことも課題である。創意工夫がなされた展示も、来訪者が見ようとしなければメッセージは伝わらない。スタッフが声掛けで学びのきっかけを作ることも必要ではないだろうか。

4. ビジターセンターへの来訪者に対する聞き取り

聞き取り調査 質問内容案

最低限の質問事項

- ① 出身、年代、知床での滞在期間
- ② 知床で何を体験したか、又はする予定か
- ③ ②に関して、ガイドの説明からどのようなことが分かったか
- ④ ②に関して、その体験が自然に与える影響についての自身の考え

ビジターセンターにて聞き取りをする際の質問

- ・入ってすぐの人…何に興味があるか
- ・見終わった人…何が興味深かったか

その他の質問事項

- ・知床の自然遺産に貢献できることについての自身の考え
- ・知床についてどのように情報を得たか
- ・どのような宿泊施設に泊まり、何が不便であったか
- ・ツアーで来たのか（都市部からのツアーか）

表2 聞き取り調査 質問内容案

2日間を通して、計6名（2人1組の来訪者2組を含む）に聞き取りを実施した。回答者は、東京在住の週刊誌カメラマンの男性、札幌市から来た夫婦、札幌市出身の男性及び、韓国出身の学生と社会人の男性2人であった。韓国出身の2人には羅臼ビジターセンターで聞き取りをしたが、その他は知床自然センターで聞き取りを行った。

・聞き取りから得られた情報

滞在期間については、1泊2日が3名、2泊3日が2名、3泊4日が1名であった。知床訪問の目的については、5名は「観光」と回答し、1名は「仕事（取材）」と回答した。体験型ツアーの参加については、流水ウォークが1名、羅臼の知床ネイチャークルーズが3名、網走のおーろらが2名であった。前述したように、おーろらは知床外で実施されているものであり、実際はマスツーリズムに近いものであるが、聞き取りから6名全員が体験型ツアーの参加を旅程に組み込んでいたことが明らかになった。このことから、やはり冬季の知床観光において流水の体験型ツアーが重要な役割を担っているということが分かった。

聞き取り調査時、体験型ツアーの参加者にガイドの説明内容について尋ねた。流水ウォークの参加者は、「丁寧にドライスーツの着方を一から初めて着る方にもわかりやすいように説明していた。流水が全く動いていないように見えて一日一日状況が変わっていることや、ドライスーツを着ているからこそ歩けるけれど、落ちてしまえば数分しか生きていけない危険性や（自然の）厳しさをちゃんと説明してくれたことが面白かった。」と語った。知床ネイチャークルーズの参加者は、「（ガイドの説明は）あれがオオワシです（と鳥の場所を示す）くらい。…オオワシやオジロワシの生態についての説明があればいいと思う。（ガイドは）聞けば教えてくれるけど聞かないと言ってくれない。みんな写真を撮るのが目的のツアー…」とやや不満げに話した。またこの知床ネイチャークルーズの参加者から、「ネイチャークルーズの人が直接魚を餌付けしていた。」という衝撃的な事実を聞いた。

流水ウォーク参加者の話から、ツアー中に流水についての解説が少なからずあったが、知床の生態系の説明は無かった、あるいは参加者の印象に残らなかったと言える。さらに、知床ネイチャークルーズ参加者の話からは、ツアー中のガイドの説明は鳥の位置を示すだけということや、餌付けを行っていることが分かった。

5. 知床で実施されているエコツアー体験

ここで、参加した2つの体験型ツアー「スノーシューウォーク」と「ネイチャークルーズ」について紹介する。

・スノーシューウォーク

今回参加したツアーの中で、知床ネイチャーオフィスによる

「冬の知床五湖一周ツアー」（以下、スノーシューウォーク）は唯一ガイドに重きが置かれているアクティビティであった。知床の自然保護の重要性を学んでいただけに、ガイドからどのような話を聞くことができるのか、大きな期待を寄せていた。このツアーは名前の通り、冬の知床五湖を一周するもので1日2回開催されている。凍った湿地や湖面を歩き、知床連山を望むことができる。料金は1人当たり6,000円である。冬の間、知床五湖へ向かう道道93号には一般車両は入ることができない。そのため認定されたガイドの案内がなくては立ち入ることができない¹²。12時30分頃から17時頃にかけて実施されたツアーに参加した。車で道道93号を通り、ツアーのスタート地に着くと他のツアー団体も何組か集まっていた。雪上の歩行に欠かせないスノーシューを装着し、ツアーが始まった。凍った湖上を歩くこと、真っ白な知床連山を眺めること、沿岸に漂着していた大きな流水の塊を遠望することができる貴重な体験であった。ガイドからは、姿を見せる動物や植物、各場所の説明が最後まで続いた。しかしながら、説明内容はバラバラで一貫して伝えたいメッセージは見受けられなかった。ツアー終了後にガイドに話を聞いたところ、まずはツアー参加者に自然に親しんでもらうことを重視していて、はじめてから硬い話はしないようにしているという。参加者に「楽しい」「知床の自然が好き」と感じてもらうことはガイドの重要な役割であると思うが、



写真6 スノーシューを付けて歩くツアー参加者（同行した学生撮影）



写真7 ツアー終盤に見た知床連山（筆者撮影）

果たしてそれだけで良いのだろうか。自然保護教育の主な柱であるビジターセンターへの来訪者が少ないのが現状である。したがって、観光客と直接コミュニケーションを取れるガイドこそが、知床の自然の成り立ちや自然遺産の保護管理について観光客に伝える重大な役割を担うべきだと考えられる。今回のガイドの説明内容では、その役割を十分に果たしているとは言えない。

• ネイチャークルーズ

羅臼町で体験したのは、知床ネイチャークルーズの「流水&バードウォッチングA」（以下、ネイチャークルーズ）である。13時頃に羅臼港を出発し、知床半島と国後島の間を沖合を1時間かけて回るツアーで、バードウォッチングが醍醐味とされている。料金は大人1人当たり4,400円である。また、このツアーで使用されるエバーグリーンという船は、水産高校の小型実習船として使用されていた漁船である^{13,14}。羅臼の沿岸地域は斜里側に比べて流水が薄いため、おろらのような碎氷船ではなく漁船が使用されているという。このネイチャークルーズにおいても、どのような解説があるかに注目していた。しかし、船長やスタッフからはどこにウミワシがいるかを伝えられるだけで、知床の環境の貴重さや脆弱性に関する解説は全くなかつ



写真8 たくさんのツアー参加者を乗せたエバーグリーン（筆者撮影）



写真9 エバーグリーンから見たウミワシ
（チャクラバルティ・アビック撮影）

た。ウミワシを見られることは確かに得難い経験であるが、高い料金を払ってもう一度このクルーズに参加したいとは思わない。観光客はただ目の流水やウミワシをみて帰ってしまう一般的なマスツーリズムが行われている印象を受けた。

6. 知床ゼミを聴講して

網走から斜里町へ移動した2月10日の夕方、知床財団主催の「知床ゼミ」に参加した。地域の観光業に携わる参加者らは、人口が少ない中でいかに町を維持するかに関心があり、暮らしのために観光があるという意識を強く持っている印象を受けた。一方で、当日の知床ゼミで発表を行った竹中氏やチャクラバルティー講師らは、知床の自然環境の実態やその希少性について述べていた。観光業者と研究者、それぞれの考えの軸が一致しておらず、平行していた。質疑応答において、ある参加者が観光客に対するおもてなしを大切にしたいという発言をしていたことが印象的だった。しかしながら、聞き取り調査から得られた情報からもわかるように、知床を訪れる観光客にとっての旅の目的は「おもてなし」そのものではなく、その土地ならではの自然を体験することであると考えられる。上記の参加者の発言に対しては、「おもてなし」を優先的に考えていても観光客の満足度を高めることはできないのではないだろうか、と疑問が残る。上記を踏まえ、観光業者が、研究者やビジターセンター職員とともに知床の自然環境を守っていくという共通意識をもつことが必要であると考え。その上で、地元の人だからこそ知っている詳しい歴史や知床の現状を伝えることが、観光客にとって嬉しいおもてなしになるのではないだろうか。

7. 環境省職員の話聞いて

環境省職員の守氏からは、知床の現状と環境省の立場の難しさを聞くことができた。課題を抱えているのは自然環境だけではない。構成市町の細かい利害関係がある中で、環境省が地元の輪に入っていくことができない、また、環境省職員は観光客とコミュニケーションをとる機会がないのが現状であるとのことである。守氏の発言から、ステークホルダー内の問題など、環境省が自然環境に対して行える活動にも限界があることが分かった。

V. おわりに

今回の調査は、冬季の知床における観光の特徴と自然遺産としての課題を理解することを目的とした。冬の知床では、流水やウミワシなどの容易に接することのできない自然生態系を肌で感じられることに違いない。しかしながら、現在の冬の知床観光では、自然遺産に関する知識の普及より、多数の観光客に景色を楽しんでもらうことに重点が置かれていると感じた。おーろらやネイチャークルーズに関して言えば、特殊な自然現象を活かした体験を提供することよりも、多くの観光客

を集めることに注力している。さらに、自然環境やその保護についての説明も乏しく、教育的役割が果たされていない。よってその実態はマスツーリズムであると言える。またスノーシューウォークは、ウォーキング体験そのものは自然を活用した体験であるが、ガイドの説明内容に改善の余地が見受けられた。したがって、冬季の知床半島の体験型ツアーでは、そもそも自然環境についての説明が少ない点に加え、情報を提供している場面でもコミュニケーションスキル不足が課題であると指摘できる。

今回の調査で分かったように、知床の一番の特徴は「海と陸の生態系の連続性」であり、それを最もわかりやすく象徴しているのが「流水」である。現在、温暖化が進行する中で流水は薄くなってきている。今後どれほど長く流水が存在するかはわからないからこそ、その価値を観光客に伝えるべきである。しかし、地元の観光業者と研究者との認識のギャップが相当大きく、自然環境保護への対応ができていないのが現実である。各ステークホルダー間のコミュニケーション不足やそれに伴うビジョンの共有が十分になされていない今の状況では、世界自然遺産を守っていくことはかなり難しいと言わざるを得ない。

最後に、ビジターセンターが何か所も設置されているにも関わらず、どこも集客が少ないことが非常に残念であると強調したい。ビジターセンターは展示施設としてだけでなく、来訪者と地元の有識者の接点作り、特に自然遺産の場合は自然教育の貴重な場でもある。このような現状を踏まえ、地域の当事者と地域内外の専門家が一体となって、世界自然遺産知床の価値とそれを守る行動について観光客に伝えていくことが重要であることを提言しておきたい。

参考資料

- 1 斜里町総務部企画総務課 (2020)「斜里町分野別統計書」最終閲覧日 2020 年 8 月 26 日, <https://www.town.shari.hokkaido.jp/03admini/50toukei/10bunyabetsu/files/200512.pdf>
- 2 羅臼町役場 (n.d.)「平成 30 年度 観光客入込数調査表」最終閲覧日 2020 年 8 月 26 日, https://www.rausu-town.jp/img/files/6_info/26_toukei/kanko/kanko_h30.pdf
- 3 小菅貴史・古谷勝則 (2014)「知床観光経験者と観光事業者の考える知床観光への期待と満足に関する研究」『ランドスケープ研究 (オンライン論文集)』7 (0) 9-16. 最終閲覧日 2020 年 4 月 9 日, https://www.jstage.jst.go.jp/article/jilaonline/7/0/7_9/_pdf
- 4 知床自然センター (n.d.)「世界自然遺産」最終閲覧日 2020 年 4 月 5 日, <http://center.shiretoko.or.jp/shiretoko/isan/>
- 5 北海道オホーツク総合振興局 (n.d.)「知床の生態系」最終閲覧日 2020 年 4 月 5 日, <http://www.okhotsk.pref.hokkaido.lg.jp/pickup/sekaishizenisan/index.htm>
- 6 IUCN. (2020). Blakiston's Eagle-owl. Retrieved August 26, 2020, from <https://www.iucnredlist.org/species/22689007/93214159>
- 7 IUCN. (2020). Steller's Sea-eagle. Retrieved August 26, 2020, from <https://www.iucnredlist.org/species/22695147/93492859>
- 8 環境省 (2019)「環境省レッドリスト 2019 の公表について」最終閲覧

- 覧日 2020 年 4 月 5 日, <http://www.env.go.jp/press/106383.html>
- 9 環境省 (2019) 「別途資料2 環境省レッドリスト 2019」 最終閲覧日 2020 年 4 月 5 日, <https://www.env.go.jp/press/files/jp/110615.pdf>
- 10 斜里町役場 総務部環境課 自然環境係 (n.d.) 「運動の歴史」 最終閲覧日 2020 年 4 月 5 日, <http://100m2.shiretoko.or.jp/history/>
- 11 道東観光開発株式会社 (n.d.) 「船のご案内」 最終閲覧日 2020 年 4 月 5 日, https://www.ms-aurora.com/abashiri/information/structure.html#wrp_distribution
- 12 株式会社知床ネイチャーオフィス (n.d.) 「夏とは違う白銀の景色へ「知床五湖一周ツアー (半日)」」 最終閲覧日 2020 年 8 月 26 日, <https://www.sno.co.jp/w-goko.html>
- 13 有限会社知床ネイチャークルーズ (n.d.) 「厳しい知床・羅臼の冬を体感するなら流水クルージング。流水・バードウォッチング (1 月～4 月)」 最終閲覧日 2020 年 8 月 27 日, <http://www.e-shiretoko.com/wintertimetable.html>
- 14 有限会社知床ネイチャークルーズ (n.d.) 「最新鋭の航海設備! 「エバーグリーン」 で快適・安全な知床クルージング。」 最終閲覧日 2020 年 4 月 5 日, <http://www.e-shiretoko.com/evergreen.html>

指導教員 チャクラバルティー・アビック (和歌山大学観光学部講師)

受理日 2020 年 6 月 25 日